

ヨーロッパのコメニウス関係博物館

井ノ口 淳三*

要 旨

17 世紀の教育家コメニウス (J. A. Comenius, 1592 - 1670) は、祖国チェコはもとよりドイツのヘルボルン、ポーランドのレシュノ、ハンガリーのサーロシュパタク、オランダのナールデン、スロヴァキアのブラチスラヴァとレヴォチャなどヨーロッパ各国の博物館で展示が見られる。このように 6 つの国の博物館で展示される人物は、きわめて珍しい。そこで本稿ではそれぞれの展示の特徴について考える。

キーワード

コメニウス教育博物館、ヘルボルン、レシュノ、サーロシュパタク、ナールデン、ブラチスラヴァ、レヴォチャ、『世界図絵』

1. ヘルボルンの市立博物館

17 世紀の教育家コメニウス (J. A. Comenius, 1592 - 1670) は、貧富、身分、性、居住地、民族等の差異にかかわらず、すべての人に学ぶ機会を設けることを提案した。彼は、知識や情報が一部のみに独占されていた当時の状況への批判から、すべての人がすべてのことを学べるよう提案したのである。そのことを通して、若者が物事についての認識を深め、積極的に行動することによって、30 年戦争で荒廃した社会を再建し、平和な世の中を築くという構想を持っていた。学ぶ機会に恵まれなかった人が学習を困難と感じず、楽しくわかりやすく学べるように挿絵入りの『世界図絵』を考案し、出版した。

コメニウス自身も幼くして両親を病気で亡くしており、他の子どもたちよりも学校で学び始めるのは遅かった。しかし、学習能力の高さを認められ、両親の属していたチェコ兄弟教団の牧師になることを期待されて教団の援助によりドイツのヘルボルン Herborn に留学する機会が与えられたのである。

ヘルボルンは、フランクフルトから電車で 1 時間ほどの小さな町であるが、700 年を超える歴史を持っており、旧市街は木組み建築の美しい景観を保っている。そしてコメニウスの学んだホーエ・シューレは、当時ドイツで唯一の福音

主義派の単科大学であった。その建物が現在では市立博物館として活用されている。建物入口の壁にはコメニウスの顔を形どったレリーフがある。



ヘルボルンの市立博物館

1 階はヘルボルンを含むヘッセン州の歴史に関わりのある展示があり、2 階では教育関係の展示がなされている。その中にコメニウスにゆかりの資料が公開されている。コメニウスが学んでいた当時の学生数の統計や大学生の服装をしたマネキンも展示されている。いかめしい表情で描かれることの多いコメニウスも学生時代には、このようにお洒落なファッションで装っていたのかと想像すると微笑ましい。

* 追手門学院大学名誉教授



17世紀の学生



グレゴールによる肖像画

ドイツへの留学後チェコに戻ったコメニウスは、教団から期待された通りにブシェロフ Píseňov で教師、フルネック Fulnek で牧師を務めた。しかし、30年戦争の影響を受けて逃亡生活を余儀なくされた。そして1628年には教団の信者と共に隣国のポーランドへ亡命した。ポーランドではエルブロング Elbląg やレシュノ Leszno に通算23年間滞在し、彼自身「第二の故郷」と述べていた。

2. レシュノの郷土博物館

レシュノはポーランド西部の町で、現在でも人口約7万人の規模であるが、旧市街にはコメニウスに関係のある場所が10箇所以上もあり、コメニウスの名称をつけた学校もある。郷土博物館はコメニウスの住居と彼が通っていた教会のほぼ中間にあり、そこでは民族衣装や民具等の他にコメニウス関係の展示も見られる。『世界図絵』をはじめとする彼の著作や研究書、メダルなどは、他の博物館とも共通しているが、フェルディナド・グレゴール (Ferdynad Gregor) による肖像画は、この博物館の特色あるコレクションの一つである。

ポーランドに滞在中にコメニウスはイギリスやスウェーデンから招かれて渡航した。これらの国の図書館にもコメニウスの貴重な原稿や著作が所蔵されている。私が1995年にロンドンのおもちゃ博物館を訪ねた時には、フレーベルと並んでコメニウスの写真も幼児教育の先駆者として展示

されていたが、2014年に再訪した際にはさすがに展示の入れ替えが行われていた。

3. サーロシュパタクの学校博物館

コメニウスは、その後ハンガリーの学校改革の仕事を要請され、東部のサーロシュパタク Sárospatak に1650年から4年間滞在した。その間彼は『世界図絵』の他に『遊戯学校』等も執筆し、演劇による教育も実践した。当地には現在コメニウス教育大学があり、2006年の演劇教育に関する国際学会がここで行われたのは、そのような背景があったからである。私もコメニウスの演劇教育論について発表したのが、『世界図絵』を日本語に翻訳したことが評価され、ハンガリー語訳の復刻版を壇上で授与されたことを思い出す。

サーロシュパタクの学校博物館は小さな建物であるが、コメニウス関係の展示も見られる。同じ敷地には当時コメニウスがかかわっていたギムナジウムの建物も残されており、その壁面にはコメニウスのレリーフがある。また、立派な図書館も残されている。これらの書物は17世紀に外敵に襲われた際に苦勞して別の場所に移動し、保存されたと伝えられる。



サーロシュパタクの図書館

博物館には、コメニウスの著作や手紙、メダルなどの展示の他に、支援者の肖像画があり、小さな教室も一部復元されていた。そして 1651 年に領主からコメニウスに与えられていた報酬の一覧が記載されているパネルもあったが、これは貴重な資料である。



サーロシュパタクの展示

さて、ハンガリーでの滞在後にポーランドに戻ったコメニウスの生活は、スウェーデンとの戦争によって安定せず、レシュノの大火の結果、コメニウスは執筆済みの原稿や書籍など多くのものを失った。そして 1656 年にオランダのアムステルダムへ移住した。

4. ナールデンのコメニウス博物館

コメニウスは、アムステルダムでは運河沿いの建物に居住した。その建物は有力な商人の館で、一人で留守番をしていた女性が 6 人の盗賊を退治したという逸話が残されており、6 つの首を並べた建物の写真は、旅行案内書にも紹

介されている。2010 年にアムステルダムで国際教育史学会が開催された際に、大会の公式行事の一環としてこの建物を見学する機会があり、一般には公開されていない内部に入れたことは有益であった。

コメニウスは 1670 年に亡くなるまで 15 年間アムステルダムに滞在したが、その間に彼の肖像画をレンブラントが描いたと言われている。「ある老人の肖像」と題するその作品は、現在フィレンツェのウフツイー美術館が所蔵している。レンブラントには「テュルプ博士の解剖学講義」という有名な作品もあり、それはデン・ハーグにあるマウリッツ・ハイス美術館に所蔵されている。このテュルプ博士はアムステルダムの市長も務めた人だが、オランダにおけるコメニウスの支援者の一人だったと伝えられている。ちなみにこの作品に描かれているヴェサリウスの『人体構造論』の中の解剖図は、『世界図絵』の挿絵に示唆を与えたのではないかとと思われるほどよく似ている。

レンブラントの描いた老人のモデルが本当にコメニウスであったのか否かについては異論もないわけではないが、現在博物館として公開されているレンブラントの家とコメニウスが滞在していた館とは徒歩でも容易に移動できるほどの近さであり、同時代に至近距離で生活していた両者の接点があったものと推測したい。レンブラントは 14 歳でレイデン大学に入学したほどラテン語もよくできたようであるから、二人がコミュニケーションをとることに困難はなかったはずである。



ナールデンのコメニウス像

コメニウスは15年間のオランダ滞在中に『教授学著作全集』を出版したり、ブレダで和平の交渉に携わったりしたが、1670年に死亡した後アムステルダム近郊のナールデン Naarden に埋葬された。ここはきれいに整った星形要塞の町として知られており、コメニウスの名前をつけた書店もある。町の中心部に位置する教会の横には彼の大きな像が置かれ、その近くに彼のお墓と博物館がある。このお墓はチェコ政府の援助も受けて整備されており、チェコからの訪問者も少なくない。



コメニウスのお墓の前で

博物館の展示は、コメニウスが作成したとされる地図もあれば、レンブラントによる肖像画の複製画もある。子どもたちの描いた「現代版世界図絵」も興味深い。売店には、コメニウスの著作のオランダ語訳やパンフレットが幾種類も置かれており、絵葉書やマグネット、ボールペンなどのコメニウス関連グッズも豊富に販売されている。ここで購入した陶製の皿に描かれた肖像画は今では入手できないもので、我が家の入り口に飾っている。

5. スロヴァキアのエデュケーション博物館

最後にスロヴァキアのブラチスラヴァ Bratislava とレヴォチャ Levoca のエデュケーション博物館について触れておく。コメニウスはスロヴァキアに長期間滞在することはなかったが、しばしば各地を訪問した。現在首都ブラチスラヴァにはコメニウス大学が置かれ、ドナウ川の対岸にエデュケーション博物館がある。

博物館にはコメニウスの肖像画や復元された教室なども

あるが、公開されていない備品室には教材用の掛図が大量に保管されていた。これらは各地の学校で実際に使われていたものである。



教材用の掛図

また、スロヴァキア東部の町レヴォチャには、障がい児教育の博物館がある。小さいとはいえ専門の博物館は珍しい。視覚障がい児が触って理解できるように立体的な地図やミニチュアの建物、手話の絵のパネルなどが展示されている。コメニウスも障がい児教育の先駆者の一人として紹介されていた。



障がい児教育の教具

この博物館の近くには1685年に『世界図絵』の最初のスロヴァキア語訳が当地で出版されたことを示すプレートがある。

以上コメニウスの展示のあるヨーロッパ各地の博物館を紹介してきたが、それぞれに特徴があり、いずれもコメニウス研究に貢献している。

引用・参考文献

コメニウス (1988) 井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房、およびコメニウス (1995) 平凡社。

井ノ口淳三 (2011) 「コメニウスと見る世界」教育哲学会『教育哲学研究』第 103 号。

相馬伸一 (2017) 『ヨハネス・コメニウス』、講談社。

本稿に関連するホームページを参照されたい。

ヘルボルンの市立博物館 <http://www.museum-herborn.de/>

レシュノの郷土博物館 http://www.muzeum.leszno.pl/strona_PL/about

サーロシュパタクの学校博物館 http://www.museum.hu/kiallitas/11635/Iskolatortenet_kiallitas

ナールデンのコメニウス博物館 <http://www.comeniusmuseum.nl/>

ブラチスラヴァの教育博物館 <https://www.visitbratislava.com/places/cvti-sr-museum-education-pedagogy/>

レヴォチャの教育博物館

<http://www.sunflowers-agency.com/attractions/museum-of-special-school-in-levoca-20.php>

本稿は、日本学術振興会の科学研究費（課題番号 26381052）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。